

日本の地名に関する参考図書の評価

—内容による評価を中心として—

Evaluation of Reference Books on Japanese Geographical Names

—According to their Performance in Answering Questions—

浅井 しのぶ

Shinobu Asai

Résumé

Reference books on Japanese geographical names are evaluated according to their performance in answering specific reference questions. Twenty-nine books are examined, each answering thirty-eight questions on Japanese geographical names. Other evaluation criteria are also considered, so that each book is evaluated comprehensively. Based upon evaluation, general guidelines on building reference collections about Japanese geographical names are proposed.

- I. 地名に関する情報と参考図書
 - A. 調査・研究の目的と方法
 - B. 地名に関する参考図書
 - C. 地名に関する情報要求
 - D. 評価基準
- II. 内容による評価1
 - A. 読み
 - B. 場所
- III. 内容による評価2
 - A. 歴史
 - B. その他
- IV. 総合評価
 - A. 検索の難易度と正確性による評価
 - B. 個々の参考図書の評価
- V. 地名に関する参考図書の収集に対する一試案
 - A. 参考図書の重要度による推薦図書
 - B. 地名に関する参考図書の所蔵状況と問題点

浅井しのぶ：慶應義塾大学三田情報センター，東京都港区三田 2-15-45.

Shinobu, Asai : Mita Library and Information Center, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

1989年3月27日受付

I. 地名に関する情報と参考図書

A. 調査・研究の目的と方法

優秀なレファレンス・ブック多数を収集し整備することは、レファレンス・ワークの機能を高め、優秀なレファレンス・サービスを展開するための基礎である¹⁾。

大規模な図書館では多くの参考図書を収集することが可能であるが、中小規模の図書館では、限られた予算内でより優秀な参考図書を集めなくてはならない。特に公共図書館においては、あらゆる利用者を想定し、あらゆるタイプの情報に答えられるような参考図書を揃える必要があるだろう。それには、どのような情報が求められるのかを調べ、それに答えられるだけの参考図書を揃えて置かなければならない。

地名に関する情報要求には、地名の「読み」「歴史」など様々なタイプがある。そして、それぞれの情報のタイプによって利用できる参考図書も違う。それぞれ、どのような参考図書を使うことができるのか、そしてその中で一番使いやすいものはどれか。それを調べるためには、それぞれの参考図書に含まれている情報(内容)を調べることが必要である。そこで、本論文では、特に内容の面から参考図書を評価し、その結果を基に地名に関する参考図書のコレクションを考えてみたいと思う。

評価の方法として、地名に関する参考質問を実際に解いてみることにした。この方法では、まず、事例集などから参考質問を集めることによって、地名に関する情報要求にはどのようなものがあるのかを知ることができる。そして、実際に解くことによって、質問のタイプごとに利用できる参考図書を分けることができる。更には個々の参考図書の内容をより詳しく知ることができるし、検索の難易度も併せて評価できる。

評価手順は次の通りである。まず参考図書それぞれにつき、参考質問を38題ずつ解いてみる。解く時に、評価表に個々の図書の評価を書き込む。次に、結果を質問ごとに整理し、利用できた参考図書を挙げる。あらかじめ、質問はタイプ別に分けてあるので、情報のタイプごとによって利用できる参考図書がわかるわけである。そして、そのタイプごとに一番使いやすいものを選ぶ。内容のタイプごとによる評価を行なった後、他の面からの評価を加えて、個々の参考図書を総合的に評価する。そして、その結果を基に地名に関する参考図書のコレクシ

ョンを考える。

B. 地名に関する参考図書

地名に関する参考図書には地名事典をはじめ、地名索引、地図帳、地域年鑑、旅行案内書など様々なものがある。いま長沢など²⁾³⁾に従って主な参考図書を列挙すれば、次のようになるだろう。

地名事典：“各地方の呼び方・書き方を確認し、所在や起源、そしてその地方の示す地域の性格・特徴を説明し、他との関連をも解説する目的で編集されたもので、地名の音順(五十音・ABC)や、地方別・都道府県順などに配列したもの”³⁾。

地名索引：長沢などは特に定義をしていないが、索引は、“特定の記録資料に含まれている各種の情報が探知できるように、それを項目として抽出し、所在機能を与え、一定の順序に配列したもの”なのでそれを地名だけに限ってまとめたものと考えればいだろう。

地図帳：多数の地図を、冊子体に編集したもの。

地域年鑑：地域的な限定を設け、その地域に関連する事項を選んで編集した一種の逐次刊行物。

旅行案内書：詳細な案内地図を折り込み、著名な建造物、名所旧跡、宿泊施設などの所在地を示し、交通機関、特産品、年中行事など、その土地に関する豊富な情報をまとめたもの。

以上のようなもののうち、本論文で扱うものを次のように想定する。

明治時代以降1988年3月までに日本で発行された日本語の図書であること。扱う地名は日本の地名だけに限定する。

扱う参考図書の種類は、主に地名事典を中心に、地名索引、年鑑、その他全国地名読みがな辞典、全国市町村名変遷総覧など地名関係の参考図書を取り上げる。地図帳と旅行案内書は評価の対象にしないが、参考質問を解く際に、これらを使った方が良いと思われるものについては、参考のため記した。特定の地域・県などに限られるものは省き、全国的なものに止めた。

参考図書は、日本の参考図書解説総覧⁴⁾、最近の参考図書⁵⁾などの解題書誌や文献リストから探した他、直接図書館の書架や目録からも調べた。その中で、現時点での利用を考えて、現在利用可能なものを主とした。

対象とする参考図書とその書誌的事項については、第1表に示す。

C. 地名に関する情報要求

地名に関する情報要求としてどのようなものがあるの

第1表 対象とする参考図書リスト

1. 吉田東伍. 大日本地名辞書 [大日¹⁾]. 増補版. 東京, 富山房. 1969-1971, 8冊.
2. 平凡社. 日本歴史地名大系 [歴大]. 東京, 平凡社, 1979.
3. 三省堂編集所編. コンサイス地名辞典: 日本編 [コン]. 東京, 三省堂, 1975, 1287 p. (1987に改訂版 コンサイス日本地名事典発行)
4. 角川日本地名大辞典編纂委員会編. 角川日本地名大辞典 [角川]. 東京, 角川書店, 1978-.
5. 渡辺光 ほか. 日本地名大事典 [地大]. 東京, 朝倉書店, 1967-1968, 7冊.
6. 渡辺光編. 日本地名事典 [地事]. 東京, 朝倉書店, 1954-56, 4冊.
7. 澤田久雄編. 日本地名大辞典 [地辞]. 東京, 日本書房, 1937-1938, 6冊.
8. 山口恵一郎編. 日本地名辞典: 市町村編 [市町]. 東京, 東京堂出版, 1980, 642 p.
9. 山口恵一郎編. 日本自然地名辞典 [自然]. 東京, 東京堂出版, 1983, 742 p.
10. 徳久球雄, 三省堂編集所編. コンサイス日本山名辞典 [山名]. 東京, 三省堂, 1978, 619 p.
11. 藤岡謙二郎編. 日本歴史地名辞典 [歴地]. 東京, 東京堂出版, 1981, 540 p.
12. 藤岡経平. 国史地名辞典 [国史]. 復刻版. 東京, 村田書店, 1976, 977 p.
13. 山中襄太. 地名語源辞典 [地語]. 東京, 校倉書房, 1968-1979, 2冊.
14. 吉田茂樹. 日本語源辞典 [日語]. 東京, 新人物往来社, 1981, 488 p.
15. 楠原佑介 ほか編. 古代地名語源辞典 [古語]. 東京, 東京堂出版, 1981, 385 p.
16. 楠原佑介, 溝手理太郎編. 地名用語語源辞典 [用語]. 東京, 東京堂出版, 1983, 661 p.
17. 百年社編. 日本地名辞典: 日本の代表地名 2300 の由来と歴史地名の基礎知識 [百科]. 東京, 百年社, 1979. (歴史百科 5号)
18. 山口恵一郎, 楠原佑介編. 難読地名辞典 [難読]. 東京, 東京堂出版, 1978, 450 p.
19. 日外アソシエーツ編. 現代日本地名よみかた大辞典 [現代]. 東京, 日外アソシエーツ, 1985, 7冊.
20. 日本放送協会編. 日本地名発音辞典 [発音]. 東京, 日本放送出版協会, 1959-1962, 4冊.
21. 金井弘夫編. 日本地名索引 [日索]. 東京, アボック社, 1981, 2冊.
22. 金井弘夫編. 全国地名索引 [全索]. 東京, 全国地名索引刊行会, 1976-1978, 7冊.
23. 内務省地理局編. 地名索引 [地索]. 復刻版. 東京, 名著出版, 1973, 379 p.
24. 日本地名学研究所編. 日本歴史地名総索引 [歴索]. 複製版. 東京, 名著出版, 1980, 3冊.
25. ²⁾小川琢治編. 市町村大字読方名彙 [読方]・日本地図帖地名索引 [地図]. 東京, 東洋書林, 1981, 2冊. 付録; 楠原佑介編. 市町村新旧地名対照表 [新旧].
26. 日本加除出版出版部編. 全国市町村名変遷総覧 [変遷]. 東京, 日本加除出版, 1979, 1244 p.
27. 清光社編. 全国地名読みがな辞典 [全国]. 改訂版. 大阪, 清光社, 1984.
28. 国土地理協会編集局編. いつも新しい全国市町村案内 [いつ]. 東京, 国土地理協会, 1960-.
29. 自治省行政局振興課編. 全国市町村要覧昭和61年度版 [要覧]. 東京, 第一法規出版.

1: []内は, 本論文で用いる略称

2: [読方] [地図] [新旧] は, それぞれ内容が違うので, 説明の時には, それぞれ一冊として考える.

か。地名の「読み」「語源」などをはじめとしていくつかのタイプに分けられる筈である。

それらを調べるために, まず地名に関する参考質問の事例を集めた。事例は, 公共図書館から刊行されている事例集やレファレンスの参考図書から可限な限り集めるようにした⁹⁾。

そして, それらの質問をタイプ別に分けてみたのが第2表である。(同じタイプの質問がいくつかあった場合は, その中で代表的なものを挙げ, タイプごとに最低でも一つは, 質問を挙げるようにした。)

長沢雅男は, 地名に関する情報を①地名・呼称, ②起源・由来, ③位置・距離, ④面積・規模, ⑤人文環境, ⑥自然環境, ⑦案内・順路と別けている²⁾。本論文では, これを大きく4つに分けた。②については地名の起源・

由来の他に, その地名の指す地方の歴史や地名の変遷についての質問があったので, これらも加え, 地名の歴史に関する情報としてまとめた。③と⑦は場所に関する情報としてまとめたが, その中で行政地名の行政区画を問う質問があったので, この中に加えた。⑦については, 交通機関に関する質問が多かったので, 交通機関としてこの中に含めた。④⑤⑥は, その他の情報としてまとめ, その中を規模と環境に分けた。まとめると, 以下のようになる。

①読み: 日本の地名は, ほとんどが漢字で書かれているが, その読み方は難しい。一見読みやすい漢字で書かれていても, 独特の読み方があったり, 地域によって異なった読み方をするものがある。そこで, それぞれの地名の「読み」の情報が必要とされる。また, 反対に地名

第2表 地名に関する参考質問

①読み

(読み)

1. 「寿都」はわが国の地名だと言うが、なんと読むのか。
2. 昭和30年に千葉市に編入された「誉田村」の読み方は？
3. 瀬戸内晴美著「余白の春」にでてくる地名「妻有秋成村大字穴藤」の読み方は？
4. 昔の地名(江戸時代頃)で「東成郡鯉江村」の読み方は？
5. 明治27年の新聞に豊島沖とあったが「豊島」とはなんと読むのか。

(表記)

6. 岩手県一関付近に「せんまや」という町があるが、漢字でどう書くか。
7. 沖縄県の「マブニ」は漢字でどう書くか。

②場所

(行政区画)

8. 「寿都」は、どこにある地名か。(どこの地方に属するか。)
9. 「府中市」という市は 東京都の 他にもあるか。また、その中に「浅間町」という町があるか。
10. 「君津市」の市役所の所在地を知りたい。

(位置)

11. 「納沙布」岬と「ノシャップ」岬は同じ場所のことなのか。その場所はどこなのか地図で見たい。
12. 京都の「雲母坂」はどの辺にあるのか。また、別名は？
13. 「朝霧高原」というのはどこにあるのか。
14. 「武田信玄・勝頼」の墓が高野山にあると聞いたが、どの辺にあるのか。
15. 愛知県岡崎市の近くに「やなぎ川」または「やな川」という川があるか。

(交通機関)

16. 東武東上線「成増駅」は、東京都何区にあるか。
17. 秋田県「鹿角市」「河辺町」の位置と最寄り駅を

知りたい。

18. 九州地方の「開聞岳」に一番近い国鉄の駅名は？
19. 予讃本線で「高松」から「八幡浜」までの距離は何キロか。また、所要時間は？

③歴史

(語源・由来)

20. 新潟県の「沼垂」の由来を知りたい。
21. 「久能山」の地名の由来は？
22. 「信濃」「信州」の呼称はいつ頃からか。
23. 「野幌」の語源を知りたい。
24. 現在は「琉球」と書くが、古くは「流虻」と書かれている。「流虻」と書かれた由来は調べることができるか。

(歴史)

25. 日本一の溜め池と言われる「満濃池」の歴史を知りたい。
26. 「道後温泉」の起源と歴史を知りたい。

(変遷)

27. 福井県の「山東」という地名は現在のどこになるか。
28. 「北九州市」は旧何市が集まり、いつ合併した市か。
29. 「大分県」の昔の国名は？
30. 明治10年頃、全国に府県はいくつあったか。

④その他

(規模)

31. 「高崎市」の人口は？
32. 「硫黄島」の面積・周囲・東京からの距離は？
33. 「南鳥島」には人が住んでいるか。また、船は着けるか。
34. 「高妻山」の高さと「信濃川」の長さを知りたい。
35. 日本の山・川・湖の十傑は？

(環境)

36. 「能都半島」はどんな半島か。
37. 「盛岡市」周辺の地場産業などを知りたい。
38. 「八ヶ岳」の八つの峰の名前は？

の読み方だけが分かっていて、書き方が分からない場合もある。それらを「表記」に関する情報としてまとめた。

②場所：地名の場所に関する情報は、細かく三つに分けた。一つは、「この村は、何県のどこの郡に属するか」といった行政地名の「行政区画」を求めるもの。二つめは、地名の「位置」を求めるもので、地図上の位置やどの辺にあるのかといった情報が含まれる。三つめは、最寄り駅や順路など「交通機関」に関する情報である。

③歴史：歴史に関する情報も三つに分けた。一つめは、地名の「語源・由来」を求めるもの。「歴史」は、その土地で「いつ、どのようなことがあったのか」とい

ったその地名の指す場所の「歴史」に関する情報である。「沿革」とも言い換えることができる。最後は、地名の「変遷」に関する情報である。特に行政地名は変わることが多く、古い文献などに載っている地名が現在のどこに当たるのか分からない時がある。そうした地名の移り変わりについての情報を「変遷」の中にまとめた。

④その他：ここでは、今までに取り上げていない情報をまとめているのだが、大きく「規模」と「環境」にわけた。「規模」は、人口・面積など数値で表わされるような情報である。「環境」は、産業・地形・天候などその地方の特徴を主に文章で表わした情報である。

第3表 参考図書の評価基準

①編著・出版	1. 編著者の研究歴・職歴・主要著作・所属学会・現職およびそれらに対する世評はどうか。	〈付録〉	れ方は適切か。 22. 本文との関連において適切なものであるか。
〈編著者〉			23. 類書にはないユニークな特色を持っているか。
〈出版者〉	2. 出版者の業績・社会的評価（出版偏向・レファレンス資料の出版に關する実績）と世評はどうか。	〈分巻の仕方〉	24. 参考図書が数巻からなるときは、その分巻の仕方が適切か。
〈賛助機関〉	3. 賛助機関の社会的評価・刊行物に対する役割	④形態	
〈出版年〉	4. 出版年と内容の新しさはどうか。	〈印刷〉	25. 文字や数字の字体・大きさ、字間、行間は適切か。
〈改訂度〉	5. 改訂版の改訂の程度はどうか。		26. 見出し・インデクション（字下げ）の扱いは適切か。
②内容			27. 刷り上がりは鮮明か。
〈目的〉	6. 著者または編著者は目的を果たしているか。	〈挿図類〉	28. 挿図にした方が良いか、数は適切か。
〈範囲〉	7. 主題範囲はどうか。		29. 理解しやすいか。
	8. 書名や序文で明らかにされている主題の範囲はどうか。		30. 関連項目の記述を適切に補足しているか。
	9. 単独で使えるか、別の図書の補助が必要か。		31. 関連事項に近接しているか。
	10. 類書と比較してどのような特色を備えているか。	〈造本〉	32. 色彩・描写などはすぐれているか。
〈記述・表現〉	11. 著作のスタイルについて（客観的かどうか、いろいろなサイドから書かれているか。）		33. 造本が堅牢であるか。
	12. 設定されている利用対象にふさわしい記述・表現であるか。		34. 開閉が容易であるか。
〈正確さ〉	13. 収録されている情報が信ぴょう性のある正確なものか。	〈レイアウト〉	35. 紙は良質か。
〈典拠・参考文献〉	14. 典拠資料及びその使い方の適否を検討する。		36. ページがくくりやすいか。
	15. 参考文献の有無・その数と質についても検討する。		37. 背文字が明瞭であるか。
③構成			38. レイアウトはどうか。
〈項目〉	16. 項目の立て方は均等か。	1: 以下に挙げる文献を参考にし、まとめたものである。	
	17. 大項目主義か、小項目主義か。また、それは利用目的に合っているか。	1. Katz, William A. "I. Basic Information Sources". <i>Introduction to Reference Work</i> . 4th ed. McGraw-Hill, 1982, p. 3-37.	
〈配列〉	18. その主題にふさわしい配列か。	2. Shores, Louis. <i>Basic reference sources</i> . Chicago, ALA, 1954, p. 18.	
〈検索手段〉	19. 本文の項目の配列の面からだけでなく、索引・目次等と併せて検索の難易度を検討する。	3. 岩猿敏生 ほか編. "6.3 図書館資料". 新・図書館ハンドブック. 東京, 雄山閣出版, 1984, p. 134-144.	
	20. 索引の種類・精度が適切かどうか。	4. 小田泰正編. "13 参考図書の評価". レファレンス・ワーク. 東京, 日本図書館協会, 1966, p. 221-230.	
	21. 標出語の扱い方、欄外見出しの入	5. 井出翁. "5.1 レファレンス資料". レファレンス・ワーク. 東京, 雄山閣出版, 1977, p. 132-207. (日本図書館学講座, No. 8)	
		6. 弥吉光長. "3 参考集書". 参考図書: その原理から利用まで. 東京, 理想社, 1974, p. 36-42.	

D. 評価基準

参考図書の評価の基準については、Katz や Shores などが詳しくまとめている。それらをすべてまとめたのが第3表である。

この結果を見ると、評価の基準は大まかに分けて次の4つに分けられるようである。すなわち、編著や出版者

などの権威・内容・構成・形態的要素である。

この結果を基に、本論文の目的に合うような評価基準を作った（第4表参照）。内容についての評価が中心なので、特に内容面は、地名の種類、情報のタイプ、時代区分などの面から詳しく評価する。内容としては良いものを持っていても、それが正確で、検索しやすくなけれ

日本の地名に関する参考図書の評価

第4表 地名に関する参考図書の評価表

①書誌的事項	
書名_____	巻数_____
編著者名_____	出版者名_____
出版年_____	改訂度 有()年・無
価格_____円	
②内容	
〈目的〉	
〈地名の種類〉	行政 自然 集落 交通 観光 歴史
〈情報のタイプ〉	読み 表記 行政区画 位置 交通機関 語源・由来 歴史 変遷 規模 環境
〈時代〉	過去 現在 過去-現代(年)
〈付録〉	地図 その他
③正確性	
〈典拠文献・参考文献〉 有 無	
④検索の難易度	
〈構成・配列〉	五十音・漢字の画数・地方・その他
〈索引〉	五十音・漢字の画数・地方・無・その他
(検索の難易度) ○ △ ×	

ば、参考図書としては高く評価できないので、正確性と検索の難易度についても評価することにした。形態については、直接内容に関わる問題ではないので、評価の対象にはしない。詳しい評価項目については、以下のようになる。

①書誌的事項：まず、書誌事項については、チェックするが編著者や出版者の権威は、内容の評価に直接関係ないので調べない。しかし、出版年や改訂度はその情報がいづのものであるかを知る上で重要であるので評価の対象にする。価格については、参考図書をコレクションするにあたって参考とするために、チェックする。

②内容：内容についての評価は、本論文の中心であるので詳しく評価する。そのための評価項目として、目的・地名の種類・情報のタイプ・時代・付録を設けた。

目的は、前書き・序文などから編著者のその参考図書を作った意図や対象範囲などをチェックする。それによって、編著者がどのような情報を与えようとしているのかを調べることができる。

地名には、行政地名や自然地名などいくつかの種類がある。参考図書にも、行政地名だけを扱ったものや自然地名だけを扱ったものがある。求める地名の種類によって利用できる参考図書も違ってくるので、地名の種類を評価項目として挙げた。なお、地名の種類の名称や分け方は、参考図書によって違いはあるが、ここでは地大の

第5表 地名の種類¹

種 類	含まれる地名
行政地域類	地方 都道府県 支庁 郡市区町村
自然地域類	山地 丘陵 山 原 谷地 平 平野 高原 盆地 半島 岬 諸島 島嶼 礁 堆 海岸(浜 浦 磯など) 海洋(海 峡 水道 瀬戸 湾 灘など) 湖沼 河 川(峡谷 溪谷 沢など) など
集落地域類	都市 村落 字 繁華街 団地など
交通経済 地域類	道路 街道 峠 運河(堀) 用水 ダ ム 橋 トンネル 炭田 油田 鉱山 工業地帯 駅 港湾など
観光地域類	国立・国定・都道府県立公園 名所旧跡 温泉 観光行楽地(施設)など
歴史地域類	国 古称 通称 考古学・歴史学的地 名(貝塚・古墳・遺跡など) など

1：日本地名大事典（編集趣意）による

区分に従って6つに分けた（第5表参照）。参考図書によってはこの区分どおりに分けられないものもあるので、大体の目安で分類した。

情報のタイプはCで分けた通りに分類する。参考質問を解くことによって、詳しく評価する。

地名は、時代と共に変化するものなので、いつの時代の地名であるかということは重要である。また、人口や面積などの数値データであれば、それがいつのデータであるか分かっていなければならない。そこで、時代についても評価する。その区分は大きめに、現在と過去そして過去-現在と3つに分けた。過去は戦前、現在は戦後、過去-現在は古い地名も現在の地名も両方含まれていることを意味する。

付録から得られる情報も評価の対象にする。地名に関する参考図書には、地図などを付録として付けているものが多いので、そこから得られる情報も貴重である。そこで、どのような地図であるか、また本文との関係はどうかということを調べる。もちろん、地図以外の付録についても内容を検討する。

③正確性：“収録されている情報が信びよう性のある正確なものか”⁷⁾を確かめることは、重要であるが、難しい。項目すべてについての内容を調べることは不可能であるし、その内容が正しいかを判断することはできな

い。それよりも、その情報がいつどこから得られたものであるかがわかれば良い。そこで、正確性は、典拠文献、参考文献の有無とその使い方で評価することにした。また、参考文献などが詳しく明記されていれば、更に詳しい情報を得たいときには、役に立つので、その点も評価の対象にした。

④検索の難易度：検索の難易度は、本文の構成・配列と索引の面から評価する。

構成・配列では、その参考図書の目的に合わせた構成・配列になっているかを評価する。配列は大体、五十音順、漢字の画数順、地方別に分けられる。目次などから検索し易いかも検討する。

どのような索引がついているか、そしてその索引は検索しやすいかを評価する。検索のしやすさは、参考質問を解くことによって、その参考図書が使いやすいかどうかを総合的に評価する。

以上の評価表を基に、参考図書を一冊ずつ評価していく。

II. 内容による評価 1

A. 読み

地名の「読み」は地域によっても違うので非常に難しい。そこで「読み」に関する情報を与えてくれる参考図書が必要になってくる。これらの参考図書は数多いので、求められる情報によってより適切なものを選ばなければならない。

まず、「読み」に関する参考質問を解いてみると、次のことがわかった。例えば、1.「寿都」はわが国の地名だと言うが、何と読み、どこにあるのか。という質問と、2.昭和30年に千葉市に編入された「誉田村」の読み方は？ という質問では、与えられている手掛かりに違いがある。1では日本にあるというだけで場所はわからないが、2は場所が限定されている。そこで、ここでは地区が限定していない場合と限定している場合を分けて考えてみることにした。

1. 地区が限定できない場合

地名の漢字しか手掛かりがない場合は、漢字から検索できるものでなくてはならない。地名の「読み」だけを目的とした参考図書は、2つある。難読と現代である。

難読は常識的に考えて一般とは異なる読みをするもの、読み間違えやすいもの、を基準にして選んだ難読地名辞典である。対象とする地名は、郡、区、支庁、市、町、村、大字の他俗称や自然地名も含んでいる。配列は

第6表 「読み」についての質問を解くための参考図書①

—地区が限定できない場合（漢字の画数から検索できるもの）—

	配列	索引	地名の種類 ¹	時代
難読	画数	なし	行・自・集・交	現
現日	画数	音読み	行	現
コン	五十音	画数	難	現
日索	(上)五十音 (下)画数	なし	行・自・集・交	現
大日	地方	部首	行・自・集・交・観	過
歴索	五十音	画数	集(大字)	過
地索	画数	なし	行・集	過

1：行＝行政地域類
自＝自然地域類
集＝集落地域類
交＝交通経済地域類
観＝観光地域類
難＝難読地名だけを索引として扱ったもの
(第2表以下も同じ)

画数順で、検索は容易である。

難読に対して現代は、現行行政地名の読み方を網羅したものである。全部で7冊と収録地名の数は多いが、行政地名だけというのが不便である。しかし、その所在地の記述に関しては、難読より詳しい。この辞典の特徴は、音読み索引がついていることである。例えば、先に挙げた1の「寿都」を「じゅと」からも引ける。

上記の2冊は地名の「読み」を目的にしているものだが、他にも「読み」だけを目的にしてはいないが漢字の画数からひけるものがある。まず、日索である。これは、地図上の位置を検索することを目的としたもので、それぞれの地名に地図上の位置を示す座標番号を付している。上巻が五十音順で、下巻が画数順になっている。採録地名も大きな行政区画名を除いたすべての地名と幅広い。しかし、筆者が、「読みや綴りについては十分な検討を加えていない」(序文)⁸⁾と断っており「読み」が目的ではないのがわかる。

コンは、難読地名と思われるものを索引にしている。改訂版では採り上げる地名の数を増やしている(2400から7600に)。

今まで挙げたものは、大抵現在の地名を扱っている

が、過去の地名の「読み」について知りたい場合には次のものがある。

大日は、1巻に部首索引がある。見出しとして立ててあるものだけではなく、文中の語も索引に載せているのでかなり多くの地名を引ける。質問4で「東成郡鯉江村」の「鯉江村」を引けたのは、大日だけであった。しかし、部首索引なので検索したい漢字がどの部首に入っているかわかりにくいときは不便である。索引に目次があれば、もっと検索が容易になると思う。

歴索は、全国の大字の「読み」と「所属」を明らかにしたものである。索引は旧漢字の画数順だが、新字体からも検索できるので不便はない。それに対して地索は“頭字の画引きだけが検索の手掛かりで、同画内は地区別になっている”⁴⁾。旧漢字からしか検索できないのが、不便である。

2. 地区が限定できる場合

この場合、1で述べた参考図書でも勿論検索できるが他にも利用できる図書が広がる。2の質問では「菅田村」が「千葉市」であるとわかっているので、配列が地方別になっているものでも検索できるわけである。全国の町名・字名を市区町村ごとに収録し、その読みがなを明らかにしているのが全国である。これには漢字索引がついていない。似たものにいつがあり、全国と同じ構成をとっている。過去の地名を調べたい時は、読方が利用できる。構成は全国と同じである。これらは、検索する

地名の地区が詳しくわかっている程検索し易い。2の様な質問を解くのに適している。

角川と歴大は、各巻ごとに画数順の難読地名索引を付している。どちらとも総索引を刊行する予定だそうだが、1988年3月時点ではまだ刊行の途中なので、都道府県ごとに見なければならない。しかし、現在はもう存在しない様な小さな村などの「読み」を知りたい場合には、これら2冊は必要である。質問3の「妻有秋成村大字穴藤」の読み方は歴大でしか解らなかった。(角川では「新潟県」を1988年3月時点で刊行していないので検索出来なかった。)このような歴史地名の「読み」を知りたい時には、歴大や大日などの本文に直接当たって細かく調べなくてはならない。

歴史地名を集めた百科にも難読地名索引があるが地方ごとで数も少ないので「読み」だけを知りたい時にはあまり利用できない。

地名の「読み」に「発音」の仕方を示した参考図書もある。発音で、長音や鼻濁音などの記号を付している。一般の人のためよりも放送業務に利用することを目的としている。加除式だが実際には加除されていないし、刊行も途中で中断している。

以上を利用すれば、地名の「読み」に関する情報を得られる。先に挙げた1の質問には1で挙げた参考図書すべてから解くことができた。2の質問には併せて10冊の参考図書を使って解くことができた。その中でまず最初に当たってみたいのは、現在の地名に関しては難読、過去の地名に関しては大日である。難読は扱っている地名の種類も幅広く、読みづらい地名を拾っている。大日もあらゆる種類の地名を数多く扱っている点がいい。

なお、地名の表記については、五十音配列になっているものか、または五十音索引がついている参考図書で、大抵引くことができるので、ここでは特に取り上げないことにする。(配列方法と索引についてはIV章でまとめている。)

B. 場所

地名に関する情報を扱うとき、その地名が「どこにあるのか」という問題は切り離せないものである。地名に関する参考図書の中で地名の所在について書かれていないものはないと言ってよい。地名辞典のほとんどが地名の次にその場所を明記している。そして、更にその場所に辿り着くには「どのような交通機関を利用したら良いか」「最寄り駅はどこか」などの情報も求められる。そこでここでは、地名の場所に関する情報と交通機関など

第7表 「読み」についての質問を解くための
参考図書②
—地区が限定できる場合—

	配 列 ¹⁾	索引	地名の種類	時代
全国	地方	なし	行・集	現
いつ	地方	なし	行	現
読方	地方	なし	行・集	過
角川	<地名編>五十音 <地誌編>自治体別	画数 画数	難 "	現- 過去
歴大	地方	画数・五十音	難	現-過
百科	地方	画数	難(歴)	過
発音	行政地名-地方別 自然地名-五十音	画数・五十音 画数	行 難	現

1：配列・索引については第16表で詳しくまとめている。

に関する情報を得るために利用できる参考図書を分けて考えてみたい。

1. 行政区画

例えば、質問8のように「寿都」の場所がどこにあるか知りたい時にはその地名がどこに所属しているのかわかれば良い。特に行政地名であれば、行政区が分かれば大体の場所の見当がつく。そこで、ここでは、ある地名がどこの県または、市などに属しているのかわかる参考図書を考えてみた。

第8表では、「寿都」がどこにある地名かが分かる参考図書を挙げている。Aの「読み」のところで挙げた参考図書がほとんどである。

難読と現代では、現行政区が分かる。特に、現代は“地名の所在地を調べる”(刊行にあたって)ことも目的としているので、現在の行政地名の所属がすべて分かる。昔の行政区を知りたい時には、歴索か地索を利用すれば良い。歴索は昭和20年頃の大字の所属を、地索は明治18年頃の行政区が分かる。コンもかなり詳しく書かれている。

更にもう少し詳しく調べたい時には、全国などを使うと良い。「寿都郡」には「寿都町」ともうひとつ町があ

第8表 「場所」に関する質問を解くための参考図書①
—行政区画がわかるもの—

〈「寿都」を例にとって〉

	種類	時代	記 述
難読	☆ ¹	現	寿都 すつつ 北海道〔郡〕〔町〕
現代	行	現	寿都町 すつつちょう (北海道寿都郡 寿都町: スツグン) 寿都郡 すつつぐん (“ ”)
歴索	大字	過	寿都 スツ 後志 “ “ 北/後/□/○ 〈北海道(後志)寿都郡寿都村〉
地索	行	過	寿郡 寿都 後志 町 寿都 後志寿都七町 六修村 岩崎町
市町	行	現	北海道後志支庁の南西の町(文中)
全国	行	現	北海道一後志国寿都郡一黒松内町 寿都町一岩崎町…

1: ☆=あらゆる種類の地名を扱っている。
(第9表以下も同じ)

第9表 役所、郵便局などの所在地がわかる参考図書

書名	得られる情報
角川	現行の各自治体の役所(住所)
市町	現行の各自治体の役所(住所、電話番号)
全国	現行の各自治体の役所・税務署・郵便局・小、 中学校 ¹⁾
いつ	現行の各自治体の公共機関・郵便局
地図	歴史的行政地名の各自治体の役場・郵便局・ 警察署

ることが分かる。更に、「寿都町」には「岩崎町」はじめてし幾つかの町があり、その名前も知ることが出来る。そして、それぞれの町に役場、学校などがあればその印がしてある。このように役所・郵便局・学校などの所在地の情報を与えてくれる参考図書が他にも幾つかあるので、それらを第9表に記した。しかし、更に詳しく知りたい時には、電話帳などを利用した方がいいだろう。

角川以外は、全国と同じような構成だが、要覧は市町村のレベルまでしか分からない。小字・俗称まで取り上げている全国があれば便利である。

2. 位置

1では、扱う地名のほとんどが行政地名だったが、それ以外の自然地名や交通地名などではどうか。第10表では、例として質問11と12の解答を記した。「位置」を知りたい場合に一番良いのが日索である。日索は、位置検索を目的にしており、位置を座標系による数値で示している。つまり、その番号で引けば地図上の位置が分かる。1/5万・1/20万の図名も示してあるので、更に細かく調べたい時には、それらの地図に当たってみれば良い。

コンも同じように地図上の位置を記している。こちらは、1/5万の図名・1/20万の図名とその中の番号を明記している。コンと同じ表記をしているものに山の名前を集めた山名がある。過去に書かれたものには地図が有る。

地図上の位置の検索ができる参考図書は上記のものだけだが、辞典のほとんどは位置を文章で示している。第10表でそれぞれの記述を記したが、ほとんど内容は同じである。ただ、地大や自然のようにある都市からの距離などが書かれていれば更に分かりやすい。「雲母坂」の例でも、過去と現在のものでも地名の違いがあるものの、

日本の地名に関する参考図書の評価

第10表 「場所」に関する質問を解くための参考図書②
—位置がわかるもの—

〈「納沙布岬」を例にとって〉

	種類	時代	記 述
日索	☆ ¹	現	納沙布 標津 根室 414-433-22 1/5万 1/20万 県(都, 府, 支庁) 座標番号
コン	☆	現	北海道東部, 根室市東端。北海道最 東端 (43°22'57"N, 145°49'14") 地図・「納沙布」標津 4
地図	行・集 自	過	ノシャップザキ 納沙布崎 北海道 花咲 7ウ3 ノシャップザキ 野 寒崎 北海道宗谷 7キ1
地大	☆	現	根室半島の東端にあり, 根室市街よ り約 24 km, バスで45分を要する。
地事	☆	現	根室町東方約二十料, 根室(花咲)半 島の先端に位置し, 本道西東端の岬 として知られる。
地辞	☆	過	北海道根室國花咲(根室)半島の突端 にある崎。北海道本島の最東端にて 花咲郡齒舞村に有り。
自然	自	現	北海道東部, 根室半島先端の岬。根 室市街の東方約 20 km にあり, 北 海道最東端の岬である。

〈「雲母坂」を例にとって〉

	種類	時代	記 述
コン	☆	現	京都市左京区修学院から比叡山への 登山道。地図・「京都東北部」京都 及大阪 2
角川	☆	～現	〈左京区〉京都市左京区修学院地区 から比叡山の登山路にあたる坂。
歴大	☆	～現	現・左京区修学院 鷲森神社の北, 林丘寺の東を経て音羽川沿いに四明 ヶ岳・延暦寺根本中堂に至る約50町 の山路。
大日	☆	過	修学院村より比叡山に登る路を言ふ, 曼珠院の東より攀登す。
国史	歴	過	山城國愛宕郡一乗村の曼珠院の東, 修学院より叡山に登る路をいふ。

1: ☆=あらゆる種類の地名を扱っている。

第11表 地図の付いた参考図書

〈地図上の位置を検索できるもの〉

日索—国土地理院 5 万分 1 地図番号照合図

全国地方別国土地理院 5 万分 1・20 万分 1 地図名
照合図

コン—5 万分 1・20 万分 1 地図番号照合図, 300 万分 1
日本地図

50 万分 1 主要都市図(東京・京阪神・札幌・名古
屋・広島・福岡・北九州)

山名—5 万分 1・20 万分 1 地図番号照合図(本文中にも,
地図や図有り)

地図—日本地図帖(内務省及参謀本部陸地測量部作製の
1/50 万図)

〈各地方ごとの地図があるもの〉

角川—(各巻ごとに)現代交通図・考古遺跡図・現代地名
関係図など各自治体(市区町村)ごとの地図

日事—都道府県ごとの自然地名・鉄道の地図(本文中に
も地図有り)

全国—都道府県ごとの行政区画地図

市町—都道府県ごとの行政区画地図

変遷—都道府県ごとの行政区画地図(役所の所在地明記)

いつ—都道府県ごとの分県地図

歴大—(各巻ごとに)旧郡域・現都市域対照図, 自然地名
と道筋図輯製二十万—図(明 4 年作成の複製)

〈その他〉

歴地—古代の五畿七道・国名・国府所在地・道路・港を
記した図近世の新田分布図, 廃藩置県による新府
県と「共武政表」記載の輻輳地の図

記述の仕方はほとんど同じである。歴大が他のものより
少し詳しい気がするが, ひとつの例だけで断定できな
い。位置を文章で記した情報がほしい時は, どの辞典を
使っても大して差異がないようだ。

しかし, 「位置」についての情報を知りたい時には地
図があった方がよい。そこで, 第11表では地図の付いた
参考図書を挙げてみた。この中で一番地図が豊富なのは
角川である。各巻ごとに様々な特色ある地図がついてい
る。質問 14 で「高野山伽藍図」があったので, 「武田信
玄・勝頼の墓」の位置を見付けることが出来た。又, 各
自治体ごとの地図がついているのも角川だけの特色であ
る。

地事には都道府県ごとの地図の他に本文中にも随所
に地形図などを取り入れている。地事の改訂新版というべ
き地大には, 都道府県ごとの地図などが省かれているの
が残念である。

その他特色ある地図として歴大の明治 4 年作成の地図

がある。旧郡域・現都市域対照図と併せて過去の時代の地域を見るのに参考になる。

3. 交通機関

ある場所へ行くのに、「何にのって、どこで下車すればよいのか」「着くまでの所要時間は」といったような情報要求がある。特に旅行が盛んになった今、このような情報は必要になってきている。しかし、参考図書でこうした情報に答えることは難しいようである。

「交通機関」に関する質問の解ける参考図書はコンと山名ぐらいしかなかった。これらは地名ごとに最寄り駅とそこからの所要時間、または距離を明記している。他には、角川が地名ごとの記述の中で交通機関について触れているものがあるし、現代交通図の地図などからある程度情報を得られる。全国も市町村ごとに最寄り駅を明記している。

しかし、質問19のような駅から駅までの距離や所要時間などがわかる参考図書はなかった。全国旅行案内⁹⁾が、「交通機関」などについて数多くの情報を提供していたのだが、1979年に絶版になっている。刊行当初は各年版で出版する予定だった。こうした情報は常に新しい情報が求められるからだろう。しかし、現在は旅行のガイドブックなどが数多く出版されるようになった。参考図書よりもこうしたガイドブックの方が手軽に持ちこべるので、参考図書を利用する人が減っているのだろう。

その他、「交通機関」に関する情報を得るためには時刻表・運賃表などを利用した方がいいだろう。

III. 内容による評価2

A. 歴史

ここでは、地名の歴史的な情報に関する参考図書を考えてみたい。歴史的な情報は大きく3つに分けた。1つは質問20のように「語源・由来」を問うもの。2つめは質問25のように「歴史」を問うもの。そして、質問27のように地名の「変遷」を問うものである。そこで、ここでは3つに分けて、それぞれの質問に適した参考図書を考えて見ることにする。

1. 語源・由来

「語源・由来」に関する参考質問を解いてみると、利用できる参考図書は数多くあった。その中で、地名の「語源・由来」を解くことだけを目的としたものが4つある。第12表の上から4冊、つまり日語、用語、古語、地語である。これらの違いは、付録33「信濃の由来」に関する解答を比較してみるとわかりやすい。まず、用語

第12表 「語源」「歴史」に関する質問を解くための参考図書

書名	語源	歴史	地名の種類
日語	○ ¹	× ²	上代地名・全国的に多く分布する地名など
用語	○	×	地名を構成する語彙
古語	○	×	古代文献から郡郷名に準ずると思われる地名
地語	○	×	語学的に価値高く興味ある地名・地名用語・アイヌ語に由来する地名など
歴地	△ ³	○	歴史地理学上重要な地名(国名・藩名など)
国史	○	△	国史に関する重要な地名
百科	△	○	歴史地名
歴大	○	○	☆〈過一現〉
大日	○	○	☆〈過〉
角川	○	○	☆〈過一現〉
地大	△	△	☆〈現〉
コン	△	△	☆〈現〉
地辞	△	○	☆〈過〉
地事	△	△	☆〈現〉
自然	△	△	自然地名
山名	△	△	山名

1: ○=詳しく記述している

2: △=余り詳しくはないが記述している

3: ×=記述されていない

は他とは違って地名用語の語源を解説したものである。だから「信濃」で引くと「しな(品, 科, 信…)」を参照するようになっている。

古語は「和名類聚抄」や「延喜式」など古代文献から郡郷名に準ずると思われる地名の由来を説いている。ひとつの説だけでなく、いろいろな人の説を載せている点が良い。日語は、「日本の古語を基盤とした国語学上の成果を最重要視」(端書き)した解釈をしている。「シナノ(信濃・品野)」の例を見てもわかるように、古語による解釈を重んじている点が特徴である。

地語は、他と違いアイヌ語による解釈もしている所に特徴がある。一般の部と北海道の部に分けられている。扱う地名の種類も多く、解釈も多方面から行なっている。編者が「読む辞典」を意図して書いているので文章も分かりやすい。序論では語源研究のための参考文献も載せているので、語源を調べる時にはかなり役に立つ。

その他にも「語源・由来」に関する質問を解けるものがある。大日は「関係古典籍から抜粋し、その書名と出所を明示し、他人の説を採用するときはその氏名を明示

日本の地名に関する参考図書の評価

する。数説あるときにはそれを網羅する”¹⁰⁾ ことを特徴にしている。ほとんどが原文引用で読みにくいところもあるが、「語源・由来」に関しては非常に詳しい。

歴大も、同じように原文引用が多く詳しい。大日は増補しているものの初版が明治40年なので、現代の地名とは異なるものが多いが、歴大は現代の地名も載せている点が良い。その他国史や角川も詳しい。国史は明治40年の復刻であるが、「語源・由来」についてかなり書かれている。しかし、これらは詳しくさにおいて大旦や歴大には及ばない。

2. 歴史

その土地では「いつ、どのようなことがあったのか」というような質問に答えるには地名の「歴史」に詳しい参考図書でなければならない。それらを第12表に挙げている。「語源」に関する参考図書以外は、「語源・由来」といっしょに「歴史」に関する情報も与えてくれる。

この中では角川が比較的詳しい。質問25の「満濃池」、質問26の「道後温泉」の歴史についても、かなり詳しい情報を得られた。角川は“地域がほぼ同じで、歴史的につながる同語根の地名群は、まとめ見出しに伴われる連立見出しの形式で立項している”(凡例)のが特徴である。これは次に述べる地名の「変遷」を知るのにも役立つ。

百科は、代表的な歴史地名を県別に取り上げている。詳しくという点では、角川や歴大、大旦などに及ばないが、要点だけを知りたいときには役に立つ。辞典というより「読み物」的な要素が強く、文章が簡潔にまとめられている。歴史地名に関する論文なども多数含んでおり、歴史地名研究にも利用出来る。

その他歴史地理学上重要な地名に関しては歴地が使える。扱っている地名の数は余り多くないが、手頃である。第12表で△の印がついているものには、地名によっては「歴史」の記述が詳しいものも含んでいる。例えば地大は「道後温泉」の歴史については余り書かれていないが、「満濃池」の歴史については詳しい。それぞれの地名の執筆担当者が違うのでこのような違いがあるのであろう。地辞、地事なども同じである。

地名の「歴史」について詳しく知りたいときには、大旦・歴大・角川のいずれかに当たってみるのが良い。大旦・歴大については「語源・由来」の項で触れているのでここでは書かなかったが、「歴史」についても、諸書から引用を用いて説明している。

3. 変遷

第13表 行政地名の「変遷」に関する質問を解くための参考図書

書名	検索	記述方法
歴大	新・旧 ¹⁾	近世初期の郡村～現在の市町村に至る行政変遷表
角川	新・旧	市町村沿革表(M22～)を図で示している。(巻によっては、ないものもある。)
変遷	新・旧	市制・町村制施行時(M22)における郡・市町村一覧施行後の郡・市町村変更一覧、新旧市町村対照表
地図	新	市町村対照表(T11とS55.4)
地事	新	市町村配置分合一覧(S28.11～S30.9)日本総説の中で行政区画の変遷を地図で記述
いつ	新・旧	市町村新旧対照表(S21.4～)、全国市制合併編入一覧表(S20.10～)、市町村変更一覧表(S10.10～)
市町	新・旧	〈各市町村ごと〉M22以降の変遷についてはつとめて年月日まで記述、旧市町村索引有り
要覧	新	〈各市町村ごと〉合併、境界変更などの状況を年月日を付けて記述

1：新＝現在の地名から昔の地名が検索出来る
旧＝昔の地名から現在の地名が検索出来る

地名は時代と共に変わっていく。特に行政地名は時代ごとに変わっているの、「古い時代の地名が現在のどこにあたるのか」を知ることは容易ではない。特に現在では消滅してしまったような地名を捜すことは困難である。そこで、ここでは地名の「変遷」についての情報を与えてくれる参考図書を考えることにする。

第13表に「変遷」についての情報を得られる参考図書をまとめている。この中で一番詳しいのは歴大である。近世初期からの行政変遷を記しているものは他にない。本文でも古代から現代に至る各行政地名を載せている。五十音索引にそれらの地名すべてを取り上げているので、古い地名からも新しい地名からもアクセスが可能である。例えば、質問27の「山東村」は、見出しとしては立てておらず、文中で説明している。しかし、索引には載せているのでそこから引ける。又、ある程度の地域がわかっているならば、変遷表でも容易に引くことが出来る。

角川は、明治22年以降の変遷を図で示している。図はわかりやすくいいのだが、巻によってはないものもあり、すべての都道府県についてわかるわけではない。

変遷は明治22年の市制・町村制施行時の変更一覧表を載せている。しかし、索引がなく検索がしづらい。同じようなものにいつがある。昭和10年以降の変遷なので古い地名は分らないが、加除式なので変更があれば加えていくことが出来る点がいい。最新の情報を得たいときに利用出来る。

新旧は、読方の部分の市町村名を昭和55年現在のそれと比較したものである。現在の地名の下に旧地名を列挙しているので、旧地名から現在の地名を引くのは容易ではない。

市町は、市町村だけを取り上げた地名辞典であるが、それぞれの地名の下で変遷について詳しく文章で説明している。更に、合併・編入などにより消滅した主な旧市町村索引を付しているところに特徴がある。しかし、索引では該当ページしか載せておらず、そのページのどれに当たるのか探すのが容易でない。試みとしては面白いだけに、残念である。

要覧は、各市町村ごとと合併、境界変更などの状況を詳しく明記している。まとめて書かれているので、変遷が一目で分かるようになっている。

今までは個々の地名について見てきたが、質問30の「明治10年頃全国に府県はいくつあったか」のような情報を知りたいときには、地事を使えば良い。日本総説の中で、行政区画の変遷を地図を用いて説明している。

このように地名の「変遷」について述べている参考図書はたくさんあるが、小さな村などまで確実に分かるのは歴大である。

B. その他

ここでは、今までに評価していないものを見ていきたいと思う。ひとつはある特定の地域の面積や人口など、数値で表わされる情報。それをここでは「規模」の中にまとめた。もうひとつは、産業・地形・観光といった「環境」に関する情報。前者に対してこちらは、ほとんどが文章によって表わされる情報である。

1. 規模

「山の高さ」「川の長さ」「島の面積」など、規模についての質問は特に自然地名に関するものが多い。これらの質問に答えられる参考図書は、自然、コン、角川などの地名辞典類である。

これらの中で1番詳しいものは、コンと自然である。

第14表 行政地名の各自治体の面積・人口がわかる参考図書

書名	面積(典拠資料)	人口(典拠資料)
要覧	面積調 ¹ ・毎年	住民基本台帳・毎年
コン	面積調・S59.10	住民基本台帳・S60.10
角川	巻ごとに異なる	巻ごとに異なる
全国	面積調・S57.10	住民基本台帳・S58.3
市町	要覧 ² ・53年版	要覧・53年版
地大	面積調・S40.10	国勢調査・S40.10
地事	(典拠資料の記載なし)	国勢調査・S25.10
地辞	陸地測量部 ³ ・S10.10	国勢調査・T9, T14, S5, S10

1: 面積調=建設省国土地理院「全国都府県市区町村別面積調」

2: 要覧=自治省行政局振興課「全国市町村要覧」

3: 陸地測量部=参謀本部陸地測量部が測定したものの

特に自然は自然地名だけを扱った辞典なので、「規模」についても詳しい。付録に島、山、湖沼、川の一覧があり、主要なものについてはここからも検索出来る。その他、角川がかなり詳しく記述している。

地大、地事、地辞などでも分かるが、データが少し古い。やはり、このような情報は新しい方がいいので、昭和60年のデータを載せているコンが良い。山名だけを扱った山名も良い。かなり小さい山の情報も分かるので便利である。

しかし、参考図書によって多少数値に違いがある。データを集めた年代や典拠が違えば違いがでてくるのは仕方ないことであるし、一概にどれが正しいと判断することはできない。だから、この場合典拠資料が明記されていることが大切である。いつどの資料から取ったデータであるということが分かれば良いのである。自然には面積に関する資料の典拠が載っていない点が残念である。

行政地名については、面積・人口などの情報が求められる。特に人口はその地域の「規模」を知るのに参考になる。第14表で面積・人口の分かる参考図書を挙げた。しかし、これらの情報(特に人口)は変動があり、常に新しいデータが必要とされる。地大、地事、地辞などは古い時代の人口などを調べたい時以外は参考にできない

のである。

角川は、都道府県ごとに出版年が違うので地域ごとに偏りがでてしまう。コンの改訂版は、今の時点では参考にできるかもしれないが年をおごとに古いデータになってしまう。一番良いのは、各年度ごとに発行される要覧を見ることである。要覧では、世帯数・人口密度・人口増減などの情報も含んでいる。反対に言えば、年度版だからこそ、このような細かい数値データを載せることが可能なのであろう。

このような数値データの情報を与えてくれるものに日本統計年鑑や日本アルマナック¹¹⁾などの年鑑や統計がある。実際にはこちらの方を利用することの方が多いようである。

2. 環境

「能登半島はどんな半島か」といった質問に答える時には、その地方を産業・地形・気候など様々な面から説明した参考図書が必要である。いわゆる地名事典と呼ばれているものである。評価するにあたって人文環境（民族・交通・産業など）と自然環境（地形・気候・資源など）の2つの面から見て行きたいと思う。

実際の解答を比べた方が評価しやすいので「能登半島」と「盛岡」を例にとりながら比較してみることにした。（以後「能登半島」を①、「盛岡」を②とする。）

これらを読み比べて見ると、それぞれに特徴があるのがわかる。コンは、全体的に情報の量が少ない。①は、自然地名である割に自然環境についての説明がほとんどない。①を詠んだ歌を載せている点など他と違って面白いが情報の量としては物足りない。②でも、歌碑についての記述があるなど文学作品との関連を交えている点は、特色がある。

情報の量と多様性においては角川に勝るものはないだろう。地名編では①のような自然地名を始めとしてあらゆる地名を取り上げ、更に現在の行政地名については地誌編で詳しく説明している。②の記述にある通り、各自自治体ごとに現況・立地・沿革・文化財の情報を与えてくれる。特に沿革の説明では、文化の発展なども交え、人文環境についての情報には事欠かない。地名編でも、詳しい情報が得られる。①の記述では地形や気候など自然環境について詳しく書かれている。

現在の地名について知る場合、角川の次に詳しいのが地大である。それぞれの地名で執筆担当者が違うので得られる情報に多少の違いがあるが、全体的に多方面から説明している。②では角川ほど量が多くはないが、沿

革・地形・交通・産業など様々な情報が得られる。上空写真なども載っている。コンや角川に比べると情報が少し古い（昭和42-43年出版）点を考慮しながら使えば、現在でも利用できる。

歴大は、石川県と岩手県の巻が1988年3月時点で刊行されていないので、「秋田市」を例にした。歴大は歴史の項で説明したように、地名の「由来・歴史」に詳しいので、環境についての情報はほとんど得られない。

大目も同じで、刊行年も古いことから、環境などの情報を得るのには向かない。ただ、②の例にもあるように補足として、産業面などに触れているものもある。ここでは特産品の南部鉄瓶や南部縮緬について詳しく触れている。又、詩歌などの原文を載せているので、文学的な情報を得ることができる。

時代の古いものとしては、戦前刊行された地辞、戦後刊行された地事がある。地辞は行政区画などが現在と違うので、現在の情報を得ることはできない。しかし、内容は多方面に渡っており、地形や産業の説明は詳しい。①では“人情は頗る純朴にて宗教心厚し”と人情についての記述があるのは面白かった。又、台湾などの地名も扱っている点は時代を感じさせる。

地事も現在の情報を得ることはできないが、内容は多方面に渡っている。①では、地形・産業・民族と多方面から解説しており、写真も載せている。①の例では一番内容が豊富であるように思うが、地大と同じように担当執筆者がそれぞれ違うので一例だけで判断することはできない。又、地事の特徴として日本総説を載せていることが挙げられる。

最後に、市町と自然について触れたいと思う。この2冊は同じシリーズで、地名の種類を限定した地名事典である。どちらも情報の量としてはそう多くないが、多方面から説明されている。①では、自然環境的な説明と人文環境的な説明が同じぐらいの比率でされている。ひとつの説明だけに偏らず、様々な情報を簡潔にまとめている点がいいと思う。市町は、歴史の項でも述べたように行政地名の変遷などに詳しい。環境面の説明も、その地域の特徴を捉えて簡潔にまとめている。

これらの中で一番良いのは、前にも述べた角川だろう。しかし、まだすべての巻が揃っていないので、ない場合には地大を利用すれば良い。

IV. 総合評価

A. 検索の難易度と正確性による評価

第15表 内容による評価¹—①

書名	地名の種類						時代	内 容									
	行政	集落	自然	交通	観光	歴史	出版年	読み	区画	位置	交通	語源	歴史	変遷	規模	環境	付録他の内容
大日	○	○	○	○	○	○	M40初 S15再 S46増補	◎	○	○	×	◎	◎	×	△	△	凡論 -地名総説 -国号の解説
歴大 ²	○	○	○	○	○	○	S54～ 発刊中	△	○	○	×	◎	◎	◎	△	△	行政変遷表 地図
コン	○	○	○	○	○	△	S52初 S62改訂	○	○	◎	◎	△	△	△	◎	○	地図
角川 ²	○	○	○	○	○	○	S53～ 発刊中	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	資料編 -小字一覧，地図など
地大	○	○	○	○	○	△	S42～S43	×	△	○	△	○	○	△	○	◎	主要道路・公園一覧，地図など
地事	○	○	○	○	○	△	S29～S31	×	△	○	△	○	○	○	○	◎	日本総説，地図など
地辞	○	○	○	△	○	○	S12～S13	○	○	○	△	○	○	×	○	○	市町村名・台湾地名の読み方表など
市町	○	×	×	×	×	×	S55	×	○	○	△	○	○	◎	○	○	特に無し
自然	×	×	○	×	×	×	S58	×	×	○	△	△	○	×	◎	○	地名用語の解説 公園・島・山などの一覧
山名	×	×	○	×	×	×	S53初 S54修訂	○	×	◎	◎	○	△	×	◎	○	地図
歴地	○	○	○	○	○	○	S56	×	×	○	×	○	○	×	△	○	古代・近世の地図など
国史	○	○	○	○	○	○	M40初 S51複製	×	×	○	×	○	○	×	×	○	特に無し
地語	○	○	○	○	○	○	S43初 S54続篇	×	×	△	×	◎	×	×	×	×	序論に語源についての解説・資料など有り
日語	○	○	△	△	△	○	S56	×	×	△	×	◎	×	×	×	×	特に無し
古語	×	×	×	×	×	○	S56	×	×	△	×	◎	×	×	×	×	序に語源研究に関する解説有り
用語	×	×	×	×	×	×	S58	×	×	×	×	◎	×	×	×	×	序に語源研究に関する解説有り
百科	×	×	×	×	×	○	S54	△	×	○	×	○	○	×	×	△	地名エピソードなどを含む
難読	○	○	○	○	×	×	S53	◎	○	×	×	×	×	×	×	×	特に無し
現代	○	×	×	×	×	×	S60	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	特に無し

日本の地名に関する参考図書の評価

第15表 つづき

書名	地名の種類						時代	内 容								付録他の内容	
	行政	集落	自然	交通	観光	歴史	出版年	読み	区画	位置	交通	語源	歴史	変遷	規模		環境
発音	○	○	×	○	×	×	S34～S37	○	△	○	×	×	×	×	△	△	特に無し
日索	○	○	○	○	×	×	S56	○	×	◎	×	×	×	×	×	×	地図
全索	○	○	○	○	×	×	S51～S53	○	×	◎	×	×	×	×	×	×	地図
地索	○	×	○	×	×	×	M18初 S48復刻	○	○	×	×	×	×	×	×	×	各郡の町村の数を まとめた表
歴索	○	○	×	×	×	×	S22初 S55複製	○	◎	×	×	×	×	×	×	×	特に無し
地図 -讀方 -地図 -新旧	○	○	×	×	×	×	T12初 S56新装 (S56)	○	○	○	×	×	×	×	×	×	2冊で1部で <u>新旧</u> が付録である
変遷	○	×	×	×	×	×	S54	×	○	×	×	×	×	◎	×	×	地図
全国	○	○	×	×	×	×	S59	○	◎	○	△	×	×	×	○	×	地図
いつ	○	○	×	×	×	×	S35加除式	○	◎	○	×	×	×	○	○	×	地図
要覧	○	×	×	×	×	×	S43～ 毎年刊行	×	○	○	×	×	×	○	◎	×	姉妹都市一覧 都道府県の木花鳥 など

1:◎ 詳しい情報が得られる

○ 情報が得られる

△ ある程度の情報は得られるが、詳しい情報ではない

× 情報はほとんど得られない

2:「歴大」「角川」は現段階（1988年3月）では刊行途中であるため客観的な総合評価はできなかった。

II章とIII章では、情報のタイプごとにどのような参考図書が利用できるかということを考えた。本章では、それらの結果をまとめ（第15表）、更に検索の難易度と正確性による評価（第16表）を加えた上で、個々の参考図書を評価したいと思う。

検索の難易度は、実際に参考質問を解いてみることによって評価した。いかに効率よく情報を得られるかが評価のポイントになる。地名に関する参考図書であれば、地名の「読み」と「漢字」両方から検索できることが望ましい。どちらからも検索できれば、検索はしやすいと評価できる。しかし、それだけで判断するのではなく、実際に参考図書を引いてみての使い易さを評価の対象にした。

正確性は、典拠文献が明記されているかという点を評価した。更に、参考文献などがあれば、クロス・レファ

レンスも可能になるので、典拠・参考文献の有無を評価の対象にした。

B. 個々の参考図書の評価

1. 地名事典類

最初に、地名事典類を集めて評価してみたい。これらは大部のものが多く、得られる情報も豊富である。

地名事典は、配列の仕方が大きく二つに分けられる。地方別の配列と五十音順配列である。地方別の配列には、角川や地大、地事のように中が五十音配列になっているものと大日や歴大のように地域毎の配列になっているものがある。全国の地名を五十音に配列したものには、コン、地辞、市町、自然、山名がある。目的に応じてこれらを使い分ければ良い。特定の地域を詳しく調べたいときには、地方別配列のものを使えば良い。どこにある地名かが漠然としている時は、五十音配列の事典を

第16表 検索の難易度と正確性による評価①

書名	検 索			正確性
	構成・配列	索 引	難易度	
大日	各巻地方別 (全8巻)(但し1凡論・索引) 項目の配列は旧国郡別	総合索引 五十音 部首	○ ¹	項目毎に、文献を引用している場合は出典文献を明記
歴大	都道府県ごとに1巻・項目の配列は、近世と現代の地域別	(各巻ごと)五十音 難読地名の画数	○	〃 巻末に文献解題(地誌・地図)
コン	五十音順	難読地名の画数	○	〃 (大日に同じ)
角川	都道府県別に1巻(各巻ごと) 総説 地名編 - 五十音順 地誌編 - 自治体別 資料編	(各巻ごと)難読地名の画数	○	〃 (出典略称一覧有り) 各都道府県ごとに参考文献一覧有り
地大	各巻地方別 (全7巻) 各巻ごと五十音順	(各巻ごと)五十音順	×	各項目ごとに執筆担当者の名前を明記
地事	各巻地方別 (全4巻) 各巻ごと地方別。更に都道府県ごとに分けその中五十音順	(4巻索引)五十音順	△	〃
地辞	五十音順 (全6巻)	索引無し	×	項目ごとに、文献を引用している場合は出典文献を明記
市町	五十音順	旧市町村名の五十音順	△	項目毎に、文献を引用している場合は出典文献を明記
自然	五十音順	索引無し	△	〃
山名	五十音順	難読地名の画数	○	〃
歴地	五十音順	索引無し	×	〃
国史	五十音順	地方別	○	参考文献の記載無し
地語	五十音順 一般の部 北海道の部 (続編は一般の部と外国地名の部)	索引無し	○	序論に地名語源参考文献一覧有り。項目ごとに文献を引用している場合は、出典文献を明記
日語	五十音順	索引無し	○	〃 (出典略称一覧有り)

第16表 つづき

書名	検 索			正確性
	構成・配列	索 引	難易度	
古語	五十音順 (歴史的仮名遣い)	五十音順 (現代読み) 国郡郷名	○	〃
用語	五十音順	索引無し	△	〃 巻末に引用文献・資料一覧有り
百科	県別地名事典 その他、地名入門、地名研究など地名に関する記事を含む	索引無し	△	巻末に地名研究に関する参考文献有り
難読	画数順	索引無し	○	凡例に参考文献を明記
現代	画数順 (全8巻) 画数の中は部首順	音読み	○	典拠文献を明記
発音	各巻地方別 (4巻) (各巻ごと) 1行政区画-地方別 2自然物-五十音順	1 五十音順 画数 2 難読地名の画数	△	編集経過を明記
日索	上巻-五十音編 下巻-字画編 (循環綴り)	字画編が索引	○	採録地図名一覧有り
全索	各巻地方別 (全7巻) 各巻ごと五十音順	索引無し	×	〃
地索	五十音順 (旧漢字)	索引無し	×	参考文献の記載無し
歴索	1. 2巻-五十音順 3巻-画索引	画数 (旧漢字)	○	凡例に参考文献を明記
地図	読方-地方別 …… 地図-五十音順 …… 新旧-地方別 ……	五十音順 画数・駅名 索引無し	○ ○ ×	凡例に参考文献を明記
変遷	地方別	索引無し	×	〃
全国	都道府県別 その中は 市-町-村の順	市郡町村名	×	数値データの典拠は有り
いつ	1-3都道府県別 市-町-村の順 4 市町村新旧 対照表など	索引無し	×	数値データの典拠は有り
要覧	都道府県別	五十音順	○	数値データの典拠は有り

1: ○=検索しやすい
△=やや検索しやすい
×=検索しづらい

使えば良い。

まず、地方別に分けたものとして高く評価できるのは角川である。都道府県ごとに1巻を当てた事典は、角川と歴大だけであるが、歴大が歴史地理的な内容であるのに対し、角川は過去から現代に至までの様々な情報を与えてくれる。現在発行されている地名事典では、一番多くの情報を得ることが出来る。但し、都道府県ごとに出版された年代が違うので偏りがある。1回目に配本された「東京都」には、難読地名索引も参考文献一覧もない。難読地名索引がないと、検索の面では非常に不便なことが多いので、評価も下がってしまう。まだ刊行が途中なので総合的な評価を下すことはできない。

歴大も刊行途中であるが、刊行の速度が角川よりも遅く、まだ半分も揃っていない。歴大は、“大日を越えるものを意図して編集された”¹²⁾ 歴史地名事典で、前章でも触れたように地名の由来や歴史に詳しい。配列が“近世の独立村名と町方の町名を基本にして、歴史的意味を持つ各種の地名、建造物などを広く集め、現行の都市町村大字ごとにまとめる”²⁾ 方針をとっているの、分かりにくい、五十音索引が整っているの、検索は難しい。巻末に文献解題があるので、地誌などにもアクセスできる。全部揃えば、明治時代に刊行された大日よりも利用価値は高くなると思うが、現段階では、すべての地名が揃っている大日の方が確実である。

大日は、“日本地名事典の古典で、質量ともに今日最高の定評を持つ”³⁾ など高く評価されている事典である。増補版で索引を現代仮名遣いに改め、新たに漢字索引を付けた。この二つの索引が検索を容易にしている。ただ、欲を言うならば漢字索引を画数索引にして欲しかった。部首索引では、部首が分かりにくいときなど、非常に検索に手間取った。しかし、歴史地理的な情報を得たいときには、一番よい事典である。

地大は、内容としては評価できるが、検索面では評価できない。全国を7つの地方に分け、その中の地名を五十音配列している。大日のように全巻通しての索引と難読地名索引がないので、検索がしづらい。各巻ごとについている五十音索引では、文章中でしか取り上げていない地名も扱っているが、あまり利用価値はない。

地事は、“大きく地方別に分け、更にその中を都道府県別に配列し、地方及び都道府県の解説は、地方誌及び都道府県誌の総説としてそれぞれの冒頭に掲出する”(編集趣意)方法をとる。その他の項目は、地方ごと、都道府県ごとに五十音順に並べる。地方及び都道府県ごとに

総説を加え、また日本総説を設けている点が地大と異なる。内容的には、少し古い、日本総説など他と違った内容を含んでいるところが面白い。

全国を五十音順に分けたものとしてはコンが良い。個々の地名の解説については、今までに挙げた事典ほど詳しくないが、記号を多用して記述を簡略化している。文章で長々と書かれているよりも、見やすい。索引も整っているの、検索も楽である。ある地名の概略を知りたい場合は、非常に便利である。

コンと全く同じ形の山名もよくまとまっている。山名の固有名部分となることの多い名称については「かこみ」として示し、由来や意味を示すなどの工夫もされている。地名が山名だけに限っているの、コンほど利用する機会は多くないと思う。

市町と自然も特定の種類の地名を扱っている。市町は、旧市町村名索引を付けているがページ数しか記述がなく、せっかく付けた索引が生かしていないようである。自然は、索引がないので読みの分からない時は、検索できない。せめて、島・川・山別などの索引でもあれば検索がしやすくなると思う。また、自然には数値データなどがきちんと記されていない点がよくない。市町と自然は、内容的にはまとまっているのだが、総合的には高く評価できない。

地事も検索が難しい。全国の地名(台湾地名も含む)を五十音に並べているのだが、全部で6巻もある。それぞれの巻の背表紙に扱っている地名の範囲が記載されていないので非常に不便である。地名の読み方と人口表を付すなど内容としては悪くはないが、新しい情報を調べる時には参考にならない。

2. 歴史・語源に関する事典

ここでは、事典形式をとったもので、歴史・語源に関する参考図書を挙げてみたいと思う。歴史に関する地名を扱った歴地・国史・百科と地名の語源を説明した地語・日語・古語・用語を評価してみたい。

内容に関する評価はⅢ章A歴史の項で詳しく説明しているので、ここでは他の面からの評価を中心に簡単に述べることにする。

歴地は、歴史学上重要な地名を扱っており、荘園名、藩名など取り上げている点に特徴がある。しかし、それらをすべて五十音にしているの、検索はしづらく、扱っている地名の数も少ないので、高く評価できない。

国史は、復刻版で読み難い点があるが内容的にはまとまっている。国府別の索引があるので検索はしやすい

が、参考文献の記載がない点が評価できない。

語源に関する4冊の参考図書は、内容面から見るとアイヌ語による解釈などもしている地語が一番よかった。検索面から見ると、古語以外は索引を付けておらず、配列はみな五十音である。正確性の面から見ると、地語と用語が参考文献を載せている。特に地語は地名語源に関する参考文献をかなり挙げている。総合的に判断しても、これらの中では地語が良い。

百科は前にも述べたように他とは異なり、「読み物」的要素が強い。だから、索引などもなく検索はしづらいが、地名に関する参考文献を挙げていたので、地名研究には参考になる。

3. その他の参考図書

ここでは事典形式をとっていないその他の参考図書を評価したい。

現代は地名の「読み」を知るためには一番良い検索方法をとっている。それぞれの漢字に番号を与えているので、音読み索引から引く場合でも番号で引くことができる。音読み索引は漢字の画数を数えて検索するより楽なこともあるので、非常に便利である。内容面からみても、現行のすべての読みと行政区画が分かるものは、現代しかないだろう。

現代が行政地名しか扱っていないのに対し、すべての地名を扱っている難読も必要である。コンパクトで手軽に引けるというのも良い。「読み」だけをちょっと知りたい場合には、現代のように大部のものよりも難読のように簡単に引ける方が便利な時が多い。

発音は、刊行が途中で中断したので、すべての地方の地名を引くことができない。発音記号を示した参考図書が他に見あたらないだけに、すべて揃えばかなり評価できるものになっただろう。

日索は、検索の面で非常に高く評価できる。「読み」と「漢字」から検索できるだけでなく、“地名の漢字綴りについて、本来の綴りのみならず、これを順送りに一字ずつ末尾へ回してできるすべての綴りについて、索引の対象にしている”(緒言)。例えば、「新大久保」を例にとると「大久保 新」「久保 新大」「保 新大久」からも検索できるということである。内容面でも、地名の地図上の位置を座標番号で記しており、他の参考図書にはない特徴があり、総合的に評価できる。

全索は、日索の前に刊行されたもので、項目の書き方は日索と同じである。違う点は、巻ごとに地方別になっている点で、漢字索引もなく日索より使い難い。内容は

同じなので、日索があれば、こちらは必要ないだろう。

地索は、昔の行政区画と地名の読みを知るのに役に立つのだが、すべて旧漢字なので検索が面倒である。他の事典で新漢字を調べてから、検索しなければならない。

歴索は、地索と同じような情報が得られるが、検索は地索よりもしやすい。旧漢字を使っているが目次では、新漢字からも検索できるようになっている。ただ、ペン書き稿本であるので、字が小さく読みづらいという欠点もある。

地図は、読方と地図そして付録の新旧3冊からなる。内務省及参謀本部陸地測量部によって作られた地図を検索する為に作られたのが地図である。地名の下に記号が記されて地図上の位置が分かるようになっている。そして大字名でその所在を知りたいときには読方によってその属する市町村名を求め、地図による。更に現代の地名から、その地図上の位置が検索できるよう新旧が作られた。地図には、駅名索引や画数索引もあり、検索しやすいようになっている。

変遷は、行政地名の変遷を知るための参考図書である。内容的には評価できるが、地方別配列で索引がないので非常に検索しづらい。また、出典は主に官報の告示によると記してあるだけで、参考文献が具体的に挙っていない。

全国は、全国の町村、字名を市区町村ごとに収録し、読み方と役所の所在地などを明記したものである。市・郡・町・村名別の五十音索引はあるのだが、その県名・市名・郡名しか載っていない。ページ数が載っていない(通しのページ番号がない)ので直接アクセスできないのが非常に不便である。内容としては良いが、検索が不便な点は評価できない。

いつも全国と同じような情報を与えてくれる。違う点は、加除式であるということと地名の変遷が分かるということである。しかし、地方ごとの配列で検索面では不便である。

要覧は、市町村ごとの規模などのデータを知る時に利用できる。市町村長名と議会議長名も分かる。索引があるので、検索も比較的しやすい。毎年、出版されているのでデータが新しい点が良い。

V. 地名に関する参考図書の収集に 対する一試案

A. 参考図書の重要度による推薦図書

地名に関する参考図書を詳しく調べたわけだが、図書

日本の地名に関する参考図書の評価

館でこれらの参考図書を揃える場合には、どれを選んだら良いのかをまとめとして考察してみたい。

図書館の規模によって揃えられる参考図書の数は違う。特に中小図書館においては、予算の問題などから購入できる範囲が制限される。

そこでここでは、参考図書の重要度による推薦図書リストを考えてみた。図書館は一般の人が利用する公共図書館を対象に考えた。まず初めに、1 どんな小さな図書館でもレファレンス・サービスを行なうために最低限揃えた方がいいと思われる参考図書を挙げる。次に、2 できる限り揃えた方がいいと思われる参考図書を挙げる。最後に、3 更に深い情報を得るために必要な参考図書を挙げる。

まず、1 では、得られる情報のタイプが偏らないように、浅く広くあらゆるタイプの情報を得られるようなコレクションを考えた。2 では、地名に関する情報には、ほとんど答えられええるようなコレクションを考えた。特に、新しい情報を得るためには、十分な参考図書を挙げたつもりである。2 で挙げた参考図書である程度の情報を得られると思うが、更に詳しい情報を得られる参考図書を3 で挙げた。特に、地名の歴史に関することを研究するために必要と思われる参考図書を考えた。

なお、コレクションを考える場合、コストの問題は重要なので、大体の価格をコレクションごとに計算してみた。個々の参考図書の価格は第17表に示す。

1. 最低限揃えておきたい参考図書

小規模な図書館でも最低揃えて置きたいと思われる参考図書は、コン、角川、難読、地語、全国、要覧である。

コンは、あらゆるタイプの情報を与えてくれる。特に「位置」や「交通」に関する情報が豊富であるし、全国のあらゆる種類の地名を一冊にまとめている点がいい。「歴史」に関する詳しい情報以外は、ほとんどコン一冊でわかると言ってもいいだろう。

しかし、昔の地名や「歴史」「環境」などに関する情報が不十分なので補わなければならない。そこで、昔の地名を扱った総合的な事典として角川を選んだ。ただ、前にも述べたように全巻まだ揃っていない。全部揃った手頃な事典としては地大があるので、角川の代わりにこちらを揃えてもいい。そして、角川は図書館の置かれている地方の巻だけを揃えるのも経済的である。

「読み」の情報は、コンの索引からでも得ることができる。しかし、実際に参考質問を解いてみると、地名の読み方が非常に難しいことが分かった。同じ字を当てて

第17表 地名に関する参考図書の費用

書 名	一部(円)	全巻(円)
大 日		128,000
歴 大	13,800	
コ ン	3,800	
角 川	5,800~9,400	
地 大		14,000
地 事		8,000
市 町	4,200	
自 然	5,800	
山 名	2,800	
歴 地	3,800	
国 史	12,000	
地 語	2,500 (続篇 5,000)	
日 語	5,800	
古 語	3,800	
用 語	4,800	
百 科	1,500	
難 読	2,800	
現 代		98,000
発 音	1,700	
日 索		60,000
全 索		13,500
地 索	8,000	
歴 索	49,000	
地 図	16,000	
変 遷	5,750	
全 国	6,000	
い つ	5,000	
要 覧	3,500	

も違う読み方をする地名などがたくさんあるので、「読み」を確認することは大切である。そこで難読を挙げた。難読は、コンパクトで引きやすい。まず、難読で「読み」を確認してから、他の文献に当たると検索がより容易になるだろう。

「語源」についての情報は、角川などでも得ることができるが、地名用語の語源などは語源事典に頼らなくてはならない。語源事典には用語などもあるが、地語が地名用語をはじめ、比較的多くの地名を扱っているのが選んだ。続篇では外国地名の語源もわかる。

全国の町名、字名を市区町村ごとにまとめたものも行政区画を知る上で必要だと思い、全国を挙げた。一冊にまとまっているし、見易い。

人口、面積なども最新データを知るためには、要覧が

第18表 参考図書のコレクションと価格

1-①	参考図書	価格(円)	1-②	参考図書	価格(円)
	コン	3,800		コン	3,800
	難読	2,800		難読	2,800
	地語	7,500		地語	7,500
	全国	6,000		全国	6,000
	要覧	3,500		要覧	3,500
	地大	14,000		角川	
	角川			(全巻) ¹	310,000
	(関東)	49,000		計	333,600
	計	86,600			

2	参考図書	価格(円)	3	参考図書	価格(円)
	大日	128,000		歴大 ²	290,000
	山名	2,800		国史	12,000
	自然	5,800		地索	8,000
	市町	4,200		歴索	49,000
	現代	98,000		地図	16,000
	日索	60,000		歴地	3,800
	変遷	5,750		日語	5,800
	古語	3,800		百科	1,500
	用語	3,800		計	386,100
	計	313,150		+ 2	646,750
	+1-②	333,600		計	1032,850
	計	646,750			

1: 角川は、各巻価格が違うので、一卷 8000 円として計算した。

1988年3月現在39巻刊行されている。

2: 歴大は、1988年3月現在21巻刊行されているので、21巻分の価格を出した。

必要である。要覧にはこうしたデータの他に、行政区画の変遷などの情報も得られるので揃えておいた方がよいと思う。

以上の参考図書の合計を計算してみると、角川を全部揃えた場合、30万円ぐらいになる(第18表 1-②)。ただし、まだ今後、10巻以上刊行される予定なので、もう少し高くなる。しかし、例えば関東地方だけ揃えれば、約5万円(群馬県は未刊)で済む。この場合、地大を全部揃えたとしても、約9万円である(第18表 1-①)。10万円以下で、揃えられれば非常に経済的である。

2. できる限り揃えて置きたい参考図書

ここでは、予算の許す限り、揃えておいた方がよいと思われる参考図書を挙げる。新しい情報が得られ、手頃

で引きやすいものを基準にして選ぶよう心掛けた。

事典類では1でコンと角川を挙げた。角川でも歴史的なことは分かるのだが、歴史地理的な情報は大日か歴大を利用した方がより詳しく分かる。大日と歴大は内容がほとんど同じなので、どちらかを揃えて置けばいいと思う。全巻が揃えば歴大の方がいいが、現在は大日を揃えた方がいいのではないだろうか。大日があれば、古い地名の読み方なども引くことができる。

他には、山名・自然・市町などもあれば便利である。これらは、それぞれコンパクトなのがよい。自然と市町は同じシリーズだが、両方揃えなくてもどちらか一つだけでも十分に利用できる。

「読み」を調べるものでは現代を揃えた方がいいと思う。難読はいろいろな種類の地名を扱っているが数が限られている。現代は、行政地名だけがすべてを載せているという安心感がある。難読と現代が揃えば「読み」に関する質問は大体解けるだろう。

「位置」に関する情報はコンでも得ることができるが日索があれば確実だろう。検索も容易であるし、付録の地図も豊富である。日索は座標番号で位置を示しているのでコンよりも詳しい位置がわかる。更に詳しく調べれば、その地域の地図を見ればよい。

地名の「変遷」については変遷があれば便利だろう。角川や歴大の付録にも変遷表などがあって詳しくわかるのだが、各都道府県毎なので全国の地名がまとまったものとして揃えて置くのもよい。

語源事典では、古語と用語があればいいだろう。古語は古代文献に載っている地名について解説している。内容的には大日の方が詳しいが、大日を揃えない時には一冊合った方がよいだろう。地名の語源は、地語や角川、大日などでも調べられる。しかし、地名用語の語源となると地語と用語でしかわからない。地語でもある程度調べられるが、用語があれば確実である。

1で挙げた参考図書の他に以上の参考図書を加えれば、地名に関する参考質問にはほとんど答えられるのではないだろうか。

価格としては大体65万円ぐらいになる。(第18表2参照)。特に、大日と現代の価格が高いようである。

3. 更に深い情報を得るために必要な参考図書

1, 2で挙げた参考図書があれば、地名に関する情報を得るためには十分だと思うが、大きな図書館では専門的な参考図書が必要である。予算が許せば、すべての参考図書を揃えることが望ましいが、その中でも良いと思

日本の地名に関する参考図書の評価

われるものを評価してみたいと思う。

事典類は、すべて揃えた方がいいと思う。しかし、地事と地辞は内容が古いし、地大や角川でも同じような情報を得ることができるので、現在は揃える必要はないのではないか。大日は、もっと古い時代に書かれているが同じような情報を与えてくれるものが歴大の他には現在ないので重要である。特に地名の「語源」のような情報は、過去と現在でそんなに変わるものではない。だから、古い時代に書かれたものでも利用価値があるのである。しかし、歴大が全巻揃い、大日よりも多くの情報を与えてくれるようになれば、大日よりも歴大を利用することの方が多くなるだろう。

他に国史、地索、歴索、地図が復刻版である。これらは、新しい情報を与えてくれるものではないが、過去の地名を研究するには必要である。復刻版は歴史的仮名遣いなどで書かれていて読みにくい点があるが、書かれた年代の歴史的背景などもわかるので、規模の大きな図書館では揃える必要があるだろう。

歴地は、地名だけでなく歴史に関する参考図書としても利用できる所以揃えた方がいいだろう。日語は、国語学の面から解釈をしているところに特色があるので、揃えた方がいいと思う。百科は、地名の他に日本姓氏事典、日本紋章事典などとシリーズになっている。それぞれ読み物として読んでも面白いので、シリーズで揃えてもいいだろう。

全索は、日索があれば内容が同じなので余り必要ないだろう。発音も全部揃っていないので、利用しづらい。いつは、全国や要覧などで同じような情報を得ることができるので必ずしも必要ないと思う。しかし、加除式なので、きちんと揃えれば新しい情報を得ることができるので便利だろう。

以上挙げたものを合計してみると、約100万円ぐらいになる。しかし、歴大がまだ半分ぐらいしか刊行されていないので、全部刊行されると、あと30万円ぐらいは必要になるだろう。

地名に関する参考図書としては、今まで挙げた参考図書の他に、地図類・旅行案内書・時刻表・電話帳などが必要とされる。また、“特に、歴史的な意義のある地名などは、百科事典は多角的で、しかも比較的詳しい解説を加えているはずである”²⁾ので、百科事典も地名情報を得るための参考図書として利用できる。

B. 地名に関する参考図書の所蔵状況と問題点

地名に関する参考図書のコレクションを考えてみたわ

第19表 所蔵調査対象館¹⁾

図書館名	創立年	蔵書冊数 (千冊)	利用者数 (千人)	性質
1 東京都立中央図書館	S 47	987	不 明	東京都中心館
2 大田区立大田図書館	S 45	303	285, 8	大田区中心館
3 大田区立池上図書館	S 31	66	134, 5	大田区地域館
4 大田区立下丸子図書館	S 50	90	105, 8	〃
5 大田区立蒲田駅前図書館	S 55	86	277, 9	〃
6 大田区立多摩川図書館	S 58	66	141, 2	〃

1: 1は日本の図書館1986(日本図書館協会), 351Pによる。

2～5は大田区図書館案内・昭和62年版による。

けだが、図書館では実際にどのようにコレクションしているのだろうか。数館について蔵書状況を調べてみたので、地名に関する参考図書コレクションの現状なども併せてまとめてみたい。

調査対象とした図書館は第19表に示した。都の中心図書館、区を中心館そして区地域図書館を調べた。

その結果を第20表に示している。まず、すべての図書館でもっているのがコン、角川、難読である。角川は、地域館になると、東京、大阪などの主要都市と関東地方だけを揃えているところもある。

大日と地大は、地域館では創立年月日が比較的是やい2館だけが持っている。地事と地辞を所蔵しているところはほとんどない。市町と自然は、館によって違い、揃えていないところもあれば、一冊ずつしかもっていないところもある。山名は4以外すべて持っている。

語源事典では、用語が一番所蔵率が高いようである。語源事典は6を除いて大体2, 3冊は所蔵している。現代を持っているところは意外と少なかった。変遷、要覧などは所蔵率が高い。反対に所蔵率の低いものは、全索、地索、地図などである。

以上の結果とAで挙げた参考図書を比べてみると、次のことが分かった。

最低限揃えて置きたいと思われる参考図書は、ほとんどの館で所蔵している。角川は、全巻揃えていない館もあるが、都道府県ごとに一冊を当てているので、全巻な

第20表 地名に関する参考図書の所蔵状況

	1	2	3	4	5	6
コン	○	○	○	○	○	○
難読	○	○	○	○	○	○
角川	○	○	○	△ ¹	△	△
地大	○	○	○	○		
全国	○	○	○		○	
要覧	○	○		○	○	○
地語	○	○	○	○		
大日	○	○	○	○		
市町	○	○		○	○	
自然	○	○		○		○
山名	○	○	○		○	○
現代	○	○	○			
日索	○	○			○	
変遷		○	○		○	
古語	○	○		○	○	
用語	○	○		○	○	○
歴大	○	○		○		
歴地	○			○		
国史	○	○				
日語	○		○			
百科		○				
歴索	○	○				
地索		○				
地図	○					
発音	○	○				
全索	○					
いつ	○					
地事	○					
地辞						

1: △=東京都、大阪などの主要都市または
関東の県だけを集めている。

くとも利用できる。中小規模の図書館では、そのような工夫をするのもいいことだと思う。

現代と日索を所蔵している館が少ないのは残念である。現代は、費用的な問題で購入できないのかもしれないが、できれば揃えて置きたい参考図書である。

創立年月日が新しい館で、大日と地大を所蔵していないのは、新しい参考図書の方がより必要とされることを示しているのではないだろうか。文献探索学入門¹⁾ (1978) の参考図書評価と一覧では、大日と地大、更に

発音を高く評価している。中小図書館のための基本参考図書 (1968)¹³⁾ でも大日と地大を挙げている。だから、少なくともこれらの文献が出版された年代に創立されている図書館では、これらを所蔵していることが多いであろう。

しかし、時代と共に地名も移り変わり、環境も変化していく。それに併せて、地名に関する情報も変わるので、新しい参考図書が必要になってくる。森睦彦は、このことについて以下のように述べている。

全国的範囲を内容とする地名辞典類の刊行は多くはない。その上に多くのものが編集開始から刊行まで長期間を費やしている。それは市町村合併等による動揺が続いているためである。地名の変更が終わらなければ決定原稿は完成しない。ある時点で見切りをつけて刊行しても、刊行時に既に訂正部分を内蔵していることになる³⁾。

だから、角川や歴大など比較的新しく刊行されたものであっても、正しい情報を得られるとは限らない。それが、地名に関する参考図書の最大の問題と言えるだろう。だから、コレクションする時にも、それぞれの参考図書がいつの時代のどのような情報を含んでいるのかをよく知って置く必要がある。

また、本論文では、地図類や百科事典など他の参考図書類については、評価の対象にしなかったが、地名に関する参考図書として重要なものである。また、地方毎の地名事典なども数多く発行されている。今回は、これらの資料について余り触れることができなかったのもっと大きな範囲で地名に関する参考図書のコレクションを考えることが今後の課題である。

本論文の作成にあたりご指導をいただいた慶應義塾大学文学部図書館情報学科の田村俊作先生、慶應義塾大学日吉情報センター樋口恵子氏に深く感謝の意を表す次第である。

- 1) 佃 実夫. 文献探索学入門. 東京, 思想の科学社, 1969, 298p.
- 2) 地名事典の説明以外は以下の文献を用いてまとめた。長沢雅男. “5 地理地名情報の探索”. 情報と文献の探索: 参考図書の解題. 東京, 丸善, 1982, p. 181-214.

日本の地名に関する参考図書の評価

- 3) 森 睦彦. “地名辞(事)典について”. 参考図書の選び方. 日本図書館協会編. 東京, 日本図書館協会, 1979, p. 126-135.
- 4) 日本の参考図書編集委員会編. 日本の参考図書: 解説総覧. 東京, 日本図書館協会, 1980, 907 p.
- 5) 日本図書館協会 現代の図書館に掲載されている。
- 6) 参考質問を集めた事例集などは, 付録リスト①に記載してある。
- 7) 岩猿敏生 ほか編. “6.7 二次資料”. 新・図書館ハンドブック. 東京, 雄山閣出版. 1984, p. 134-150.
- 8) 対象にした参考図書から引用した場合は, () 内に引用した箇所を記した。(以後も同じ)
- 9) 日本交通公社. 全国旅行案内. 東京, 日本交通公社出版事業部, 1970-(年刊) ☆1979に絶版。
- 10) 森 睦彦. “地名辞(事)典について”. 図書館雑誌. Vol. 65, No. 1, p. 52-55 (1971).
- 11) 教育社編. 日本アルマナック. 東京, 教育社, 年刊,
- 12) 日本の参考図書編集委員会編. 日本の参考図書: 四季版. No. 55 (1879).
- 13) 東京都公共図書館参考事務連絡委員会編. 中小図書館のための基本参考図書. 東京, 東京都公共図書館参考事務連絡会, 1968, p. 23.

付録リスト①

以下に挙げるリストは, 参考質問を集める時に参考にした文献のリストである¹。

①レファレンス事例を載せている参考書と雑誌

1. 小田泰正編. レファレンス・ワーク. 東京, 日本図書館協会, 1969, 236 p. (図書館の仕事14)
2. 長沢雅男. 参考調査法: レファレンス・ワークと情報サービス. 東京, 理想社, 1969, 262 p. (現代図書館学叢書V)
3. 長沢雅男. レファレンス・ブック: 何をどうして求めるか. 東京, 日本図書館協会, 1974, 277 p.
4. 遠藤英三. レファレンス・サービス用テキスト. 第4版. 1975, 124 p.
5. 井出翁. レファレンス・ワーク. 東京, 雄山閣, 1977, 236 p. (日本図書館学講座8)
6. 小林矩子. 図書館における調査と研究: 大学生のための入門書. 東京: 蒼文社, 1978, 321 p.
7. 全国学校図書館協議会編. 図書館学演習資料 (後編). 新訂4版. 東京, 全国図書館協議会編, 1979.

8. 国立国会図書館 参考書 誌部編. 参考書 誌研究. 1970- (創刊号以来各号に事例を1, 2 載せている。)

②事例集

1. 仙台市民図書館. 文書による郷土的なレファレンス質問に対する解答事例. 1969-1973, 4 冊.
2. 福島県立図書館. みんなの調査相談室: 昭和53年度調査相談事例集. 1979.
3. 埼玉県立熊谷図書館. みんなきいている: 調査相談事例集. 1971-1981. 6 集. (第5集は郷土特集)
4. 埼玉県立川越図書館. 尋ねる・調べる・答える: 調査相談事例集. 1977-1980, 4 集.
5. 大宮市立図書館. レファレンス事例集1. 1981.
6. 千葉県立中央図書館. 生活の窓調査相談解答事例集. 1971.
7. 神奈川県資料室研究会レファレンス・サービス分科会. レファレンス・サービス事例集. 1977.
8. 富山市立図書館. レファレンス事例集. 1971-1981, 2 集.
9. 県立長野図書館. なんでもきいてみよう: 情報サービスの事例. 1964-1981, 14集および特集.
10. 名古屋市立鶴舞中央図書館. レファレンス 1968-1969: 名古屋市図書館に寄せられた質問と解答. 1969-1979.
11. 大阪市立中央図書館. 調査相談の記録. 1 (昭和38年)-10 (昭和47年) 1964-1973.
12. 兵庫県立図書館. レファレンス: 調査相談事例集. 1978-1981, 3 冊.
13. 徳島県立図書館. 調査・相談事例集 (参考奉仕事例) 昭和53/54年度-昭和55年度 1980-1981.
14. 香川県立学校図書館協議会・香川県図書館協会. 讃岐ものしり事典. 1970-1971, 2 集.
15. 愛媛県立図書館. 調査・相談の質問に対する解答事例(参考事務事例). 1970-1971, 2 集.

1: リストに挙げた文献は, 以下の文献を参考にした。

寺田光孝. “レファレンスの事例と事例集”. 図書館雑誌. Vol. 76, No. 5, p. 275-278 (1982).